

鎌倉時代の禪宗と護國思想

大 屋 徳 城

鎌倉時代は日本佛教の一大轉機を來した時代で、叡山佛教の解體の行はれた時代である。叡山では古來圓密禪戒の四種相承といつて、止觀業と遮那業と禪と大乘戒の四科を集めて一山に弘めたといふことに爲つて居る。即ち止觀業といふのは、天台止觀のことで、或は圓宗ともいふ。遮那業といふのは、眞言密教のことで、東寺の密教に對して台密をいふ。禪宗といふのは傳教大師が入唐以前に其師行表から受け、入唐して儻然から受けたのと併せて南北兩宗の禪を受けたと稱する。戒は即ち大乘戒で、圓頓戒とも稱し、道邃から受けたのである。この四種の相承が後に、台密の興隆に依りて、殆んど密教専門になり、他の三つはあれどもなきが如き有様と爲つたのである。即ち叡山の佛教は解體してしまつた譯である。最も歴史の上からみて、此解體は鎌倉時代を待たず、大分前から起つたことであり、又此四種相承といふことがどこまで本統であるかは疑問の餘地がある。殊に禪の相承については一番古い仁忠の叡山大師傳にも記載がないので、最も根據薄弱といはねばならぬ。仁忠は傳教大師の直弟子である。

傳教大師に佛法血脈のあつたことは上顯戒論表に佛法血脈一卷とあるに依つて明かであるが、其佛法血脈なるものが、今に傳ふる内證佛法相承血脈譜であるか否かについては疑問の餘地十分である。何となれば、此血脈譜には、達磨相承（禪）智者相承の法華（止觀業）同じく相承の大乗戒、終に胎藏、金剛兩界の相承（遮那業）の四種相承を擧げてあるが、第一に達磨相承を擧ぐるところが、叡山の立場としては甚だ不可解である。而して、榮西禪師を始め、鎌倉時代の禪宗が叡山の非難に對して、禪は宗祖傳教大師の相承するものであり、其衰微を再興するのに何の非難があると逆襲する時に、いつも此内證佛法相承血脈譜を引いてゐる點から考ゆると、此書は鎌倉初期に禪宗の手に依つて、僞作されたものであるかも知れぬと思ふのである。斯様に考へ來れば、叡山佛教と禪とは何の關係もないことになり、全く南宋から新に傳來したことに爲り、叡山佛教の解體とは沒交渉になるが、從來の説に依れば、とにかく叡山に禪といふものがあり、直接間接に鎌倉時代、禪宗興隆の先蹤を爲すものであるといふことに爲つて居る。

叡山佛教中に禪といふ要素があつたにせよ。なかつたにせよ、榮西禪師も、道元禪師も元々天台の僧であつたといふことは明かであり、而して、兩禪師が入宋して、夫れく臨濟と曹洞を傳へたことは事實である。其後、彼地の禪僧が本邦に歸化し、本邦の禪僧が入宋して歸つたことに依つて宋朝の思想なり、文化なりが本邦に輸入されたことはこれ亦疑ふべからざる事實である。この點は

鎌倉時代に於ける禪家の護國思想を述ぶるについて考へねばならぬ重要な要素であることを知らねばならぬ。

一般佛教に於ける鎌倉時代の護國思想に就いては、日本佛教の傳統的精神に依るものと、文永、弘安の外寇に刺激せられて俄然として高まつた愛國的精神に依るものとの二大系統がある、隨つて禪家の護國思想にも、此の二つの系統のあることを知らねばならぬ。

先づ日本佛教の傳統思想に依る護國思想といふは、飛鳥朝以來の傳統精神であつて、佛教の信仰に依つて個人の安心立命をはかると共に、國家を守護し、國家の安泰を圖るといふ考があつた。推古朝に四天王の力に依つて國家の安泰を企圖したのが四天王寺の建立である。四天王といふのは須彌山の四方にある國々を分擔して守護する四柱の神であつて、一般佛教に附隨する思想であるが、最もよく金光明經や最勝王三經に説かるゝところである。推古朝の四天王に關する思想の根據は明かでないが、其後寧樂朝に下れば、明に此兩經に依る四天王の信仰が盛んであり、其外、此兩經に説かるる辯才天とか吉祥天とかいふ神々の信仰が起つて、佛力に依つて國家を保護しようといふ考へが行き渡つて來たのである。即ち釋尊の説かれた正しき法を行ふところには、此等の神々が來て國土を護つてくれるといふことが説かれてあるので、それらの信仰に依つて國分寺が建てられ、特に僧寺を四天王護國の寺と呼ぶのは、最も明に之をいひ現はして居るのである。即ち全國に四天王

護國の寺を建て、國を守り、且つ盛んにしようとしたのである。未だ此時代には後世にいふやうな鎮護國家といふやうな標語はなかつたが、假に之を名けて正法治國又は正法護國といつても差支はないのである。即ち教法を以て國家を守護するといふ思想である。

夫れから平安初期になると、傳教大師の叡山宗も、弘法大師の眞言宗も、共に鎮護國家といふことをやかましくいひ立つることとなつた。鎮護國家といふことは、法華經なり、大日經なりを轉讀して、國家を守るといふ考へである。さて此に斷つて置かねばならぬことは、國家といふ語の意義である。國家といふ語は支那の言葉で、日本では此漢字を借用したに過ぎないが、今日いふやうな一定の主權と、一定の國土と、一定の人民とが具足して、そこに國家といふものが成立つところの國家といふものとは大分意味が違ふのである。本邦で國家といふ本來の意味は天子を國家と申すのである。そこで、本來の意味からいへば、鎮護國家といふのは、天子の玉體安穩、寶壽無疆を祈ることであつて、今日いふやうな廣い意味の國家ではないのである。されば、叡山佛敎も、東寺佛敎も鎮護國家といふ根本の意味は一般人民には何の關係もなく、上御一人の玉體の安穩、聖壽の無疆を祈り奉つたのである。それが、後世になつて、國家といふ意味が段々廣くなつて、いつとはなく今日いふやうな國家といふ意味に變つて來て、上御一人を始め奉り、廣く一般人民の安泰を圖るといふことに爲つたのである。随つて、國家といふ意味が大分廣められたのである。鎌倉時代に至つ

て、此の考へが一般に行き亘つて、國家といへば、近代的の意義に近づいて解釋されるやうになつたのである。

國家といふ意味の根本の意味、夫れからいつとはなしに廣められた意味はとにかくとして、日本佛教には教法を以て國家を守るといふ思想は鎌倉時代にも傳はつて來た。そこで、禪家に於いては榮西禪師が興禪護國といふことを唱へられた。興禪護國は讀んで字の如く、禪宗を興して國家を護るといふ考へである。最も今の興禪護國論は榮西禪師の眞撰であるか、後世の假作であるかについては、議論のあるところであるが、今はそいふ證議をする必要はないので、とにかく、興禪護國といふ言葉は、今日でいへば、榮西禪師のスローガンであつたことは明かである。次いで、無象靜照といふ人があつて、興禪記といふものをかいて居る。これはたゞ興禪記とあつて、護國とも何ともないけれど、其文章を讀んでみると、禪宗を興して國を盛んにしたいといふことが述べてあり、其趣意は榮西禪師の興禪護國論と大體同じである。斯様に鎌倉時代の禪家には興禪護國といふ思想が盛んであるが、これは本邦佛教の傳統思想であつて、別に南宋から輸入した外來思想ではないのである。

其證據には、鎌倉時代は禪家以外の宗派にも教法を以て國家を守るといふ思想は同じやうに行渡つて居るのである。其の最も著しい例は日蓮上人であるが、日蓮上人は妙法蓮華經を以て佛教中第

一の正法とし、此の教へを興して國家を守り、且つ盛んにしようといふ考へで、立正安國論を書き、守護國家論をかいたのである。其立正の正は正法の正であり、その正法は妙法蓮華經である。安國の國は申すまでもなく日本の國家である。守護國家の國家も亦同様である。されば、興禪護國といふも、立正安國といふも、其内容こそちがへ、各自分の信する正法を以て國家を盛んにしようといふ點は、寧樂朝の正法治國又は正法護國とも、平安朝の鎮護國家とも一向變らぬものであり、つまり寧樂朝以來日本佛教の傳統的精神の現はれに外ならぬのである。

さて次に現はれたのが、蒙古の來襲に刺激せられて、一時に勃興した國家思想、即ち愛國精神に依つて、佛教徒も亦日本國民として奮起したので、其結果として盛んになつた護國思想、今日の言葉でいへば、日本精神である。此の日本精神といふのは、其内容が決して單純ではないが、簡単にいへば、日本といふ國は我等の先祖なる神々の建てられた國で、外國に異る由緒の尊い正しい國であり、古來外國の侮を受けたことのない立派な國である。随つて、蒙古などに負けるものかといふ精神が中堅と爲つて、其國體の尊嚴を維持する爲めには、一死報國の精神がなくてはならぬ。此精神に依つて、國民協力一致して國難に當らねばならぬといふ考へである。即ち今日でいへば、國民總親和、國民總動員といふ考へである。されば、禪家に於いても、斯る精神が一時に盛んに爲り、國民大衆に卒先して、大に活動したのである。

之に附隨して、今一つ斯る思想を刺激したのは、宋朝の思想である。これは建長寺の開山の大家覺禪師とか、圓覺寺の開山の佛光國師とか、當時のえらい禪僧は皆宋朝から渡來した人々であり、又榮西禪師を始めとして、本邦から入宋して、禪を受けて歸朝した禪僧が先覺者となつて禪宗が興隆したのであるから、これらの人々は皆宋朝の思想なり、文化なりを見聞して、之を尊敬し、之を傳へてゐるのである。これは、當時の禪僧にしてみれば、宋の國といふのは唯一の禪宗國であり、文化國であり、到底蒙古などの比ではないのである。つまり宋朝は世界文化の中心であり、蒙古は塞外の野蠻人である。その野蠻人が文明國の宋朝に侵入し、宋朝を滅すといふことは、とりも直さず文化の破壊である。蒙古人は文化の破壊者として、輕蔑さるべきものであり、排斥さるべきものであるといふ考へが行渡つてゐるところに、今度蒙古が日本までも併呑しようといふ事になれば、大に憤慨に堪へぬのである。外來の禪僧にしても、此點に於いて、義憤を感するのである。されば、禪宗の指導的階級の人々は日本佛教の傳統的精神の外にも、斯る關係に依つて、護國の思想が一時に盛んになつたのである。

右述べたやうな内外二つの條件に依つて、鎌倉時代の禪家―特に臨濟宗―に護國の精神が奮勃として起つたのである。今二三の實例に依つて、それを述べてみようと思ふ。

文永の役に就いて思ひ出すのは東巖慧安禪師である。禪師は宏覺と諡號を賜はつた人で、西賀茂

の正傳寺に居つた人である。文永年中、蒙古の牒狀が來て、國論沸騰に際し、文永六年十二月二十七日から、同七年三月朔日まで六十三日間、石清水八幡宮に於いて、一衆を率ゐ、蒙古調伏の祈願を凝したのである。即ち朝廷に於いて、先度の牒狀には之を默殺して返牒に及ばなかつが、今二度目の牒狀には返牒がありさうだといふ風聞があつたので、憤慨にたへず、三百萬遍經王の神咒を唱へ、「萬國降伏、皆歸聖德」を祈願したのである。其願文が残つてゐるが、極めて熱烈なる愛國の精神を吐露して居る。願文の初めに、

大衆某甲今王地に在り、樹下石上、草衣木食、滴水寸土、朝恩に非るはなく、道を行じ、善を修す、皆國家に歸す。恩を知り、恩を報ずるは眞實の行業

といひ、

此の是如意摩尼寶珠、此の是れ金剛吹毛の利劍、乾坤の中、何物が降らざらん。設へ三千世界に滿つる三目八臂大那羅延、摧破不肖、いかに況んや、蒙古は譬へば師子の猫子に對するが如し。といつて、意氣蒙古を呑むの慨がある。而して、此の蒙古降伏祈願文の終に、小さい文字で、左の和歌をかきつけてある。此歌は慧安の自作かどうかは明でないが、よし他作としても、慧安が之に共鳴したから、かきつけた事は明かであるから、慧安の精神がこゝに現はれてゐるといつても差支ないのである。

すへのよの末の末までわが國は

よろづの國にすぐれたる國

これ程熱烈な愛國調があるであらうか、即ち日本精神の滿ち滿ちに立派な歌である。以て其頃の人心が如何に昂奮し、随つて、禪家に於ける護國の精神が如何に高潮したかを徴することが出來よう。蒙古降伏祈願文は大分長くて、漢文であるから、此に出すことを略し、其中の發願文だけを載せて置かう。

至心發願	一心諷誦	諸大乘經	眞言神咒
功德威力	八幡權現	法樂莊嚴	威光倍增
靈驗神威	冥加國土	今上皇帝	師子大勢
虎狼威猛	蒙古怨賊	聞之恐怖	萬國降伏
皆歸聖德	八幡大士	一切神祇	天上地下
護法善神	皆來集會	權護王宮	聖朝安穩
率土安寧			

世に文永年中のものと思はるゝ祈願文の斷簡が三つ程傳はつて居る。これは最後に住持道隆、空性首座と署名があつて、妙法蓮華經百部、二十五人各四部とあるから、二十五人の徒衆が建長寺の住

持道隆禪師の下に、法華經百部を讀誦して、蒙古の降伏を祈つた時の願文と思はれる。即ち鎌倉幕府の執權北條時宗を大檀越として、道隆禪師が導師と爲つて、蒙古來襲を祈禳した時の願文である。其一節に次のやうな言葉がある。

十方大調御、一切得道の諸賢聖、等覺妙覺仰いで證明を乞ふ。四果四向同じく昭格を垂れ給へ。次に祝獻を伸ぶ。

大梵尊天、帝釋尊天、守護正法十八諸天、忉利夜摩、四禪八定、總べて三十三天、諸天仙衆、盡天界列位聖賢、専ら祈る、弟子時宗永く

帝祚を扶け、久しく

宗乘を護り、一箭を施さずして四海安和、一鋒を露さずして群魔頓息、徳仁普く利し、壽福愈堅く、慧炬を秉りて昏衢を燭し、慈心を割いて危乏を賑し、諸天匡護、衆聖密扶、二六時中、吉祥駢集し、次に冀くは、山門肅清、中外安寧、檀信歸崇せん。

とあり、時宗の國難に對する精神が十分に現はれて居る。別の斷簡には
長へに佛法の棟梁と爲り、永く皇室の砥柱と作らん。

といふ句があつて、時宗の尊皇護國の精神が發揮されてある。而して、其指導を爲したのは大覺禪師であることは申すまでもない。

大覺禪師の示寂に遭うて、時宗は佛光國師を宋朝から迎へた。即ち圓覺寺の開山である。時宗常に禪師に參じ得る處があつたが、外寇の事實切迫するに際し、大事到來せり、如何んか之は處せんと教へを請ふや、禪師「莫妄想」の一語を以て、大喝したことは有名なる話柄として、叢林周知の事實である。時宗卒後、祖元は十種の不可思議を以て、時宗の徳を讚歎し、追懷して居るのである。

故我が大檀那杲禪門、一願力に乗じて來り、刹利種に依つて位す。其所以を視、其所由を觀るに、十種の不可思議あり。何をか十種といふ。母に事へて孝を盡し、君に事へて忠を盡し、民に事へて惠を收し、禪に參して宗を悟り、二十年乾坤を握り、喜愠の色あるを見ず。一風蠻煙を掃蕩し、略矜誇の狀あらず、圓覺を造りて以て幽鬼を濟ひ、祖師を禮して以て明悟を求む。此乃ち人天轉振ひ、法の爲に來る。乃至臨終の時、死を忍び、以て老僧の衣法を受け、了々偈を書して而して長へに行く、此は是れ世間了事凡夫、亦菩薩應世と名く。

時宗の愛國護國の精神は即ち大覺、佛光兩禪師の護國精神の發現であり、とりも直さず禪宗に於ける護國思想の表現である。降つて、鎌倉末に至れば、虎關禪師あり、元亨釋書に於いて「我が日域は純大無小」の國といひ、印度や支那にも優る佛教國といひ、「盛んなる哉、吾國は東方醇淑大乗の疆乎」といひ、前古に比なく日本精神を發揮するに至つた。これ鎌倉時代に於ける叢林の間に、如何に愛國護國の精神の盛んできつたかを證して餘りあるものといねばならぬ。(九月二十日稿)